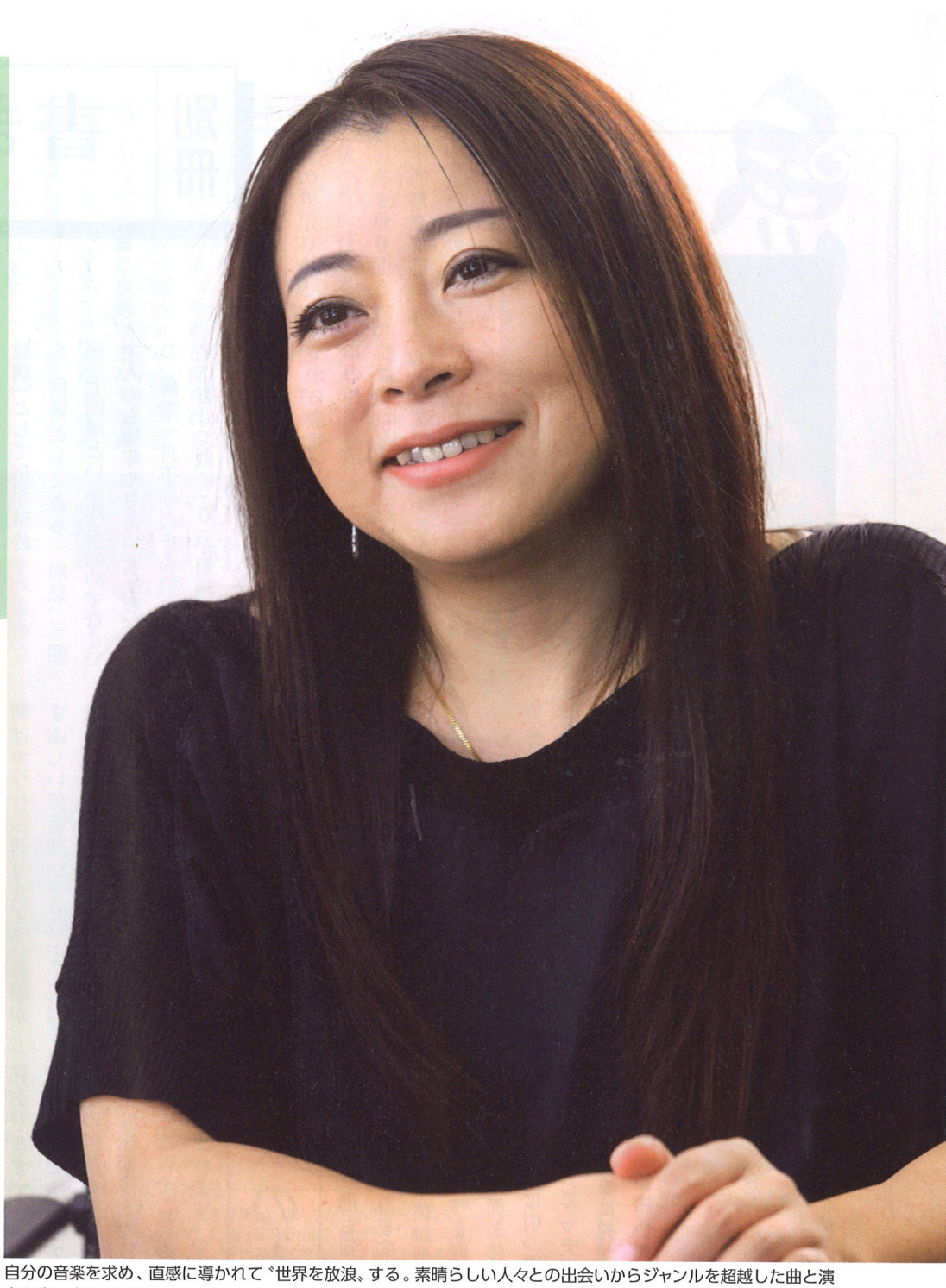
りらくインタビュー

川上 ミネ

ピアニスト・作曲家



自分の音楽を求め、直感に導かれて〝世界を放浪〟する。素晴らしい人々との出会いからジャンルを超越した曲と演奏を生み出している

現在スペインと日本を拠点にピアニスト・作曲家として活躍している川上ミネさん。ピアノを友として世界を放浪し、クラシック音楽からジャンルを超越した独自のスタイルを作り上げている。そして2013年、支倉常長が慶長遣欧使節として渡欧した偉業を記念する日本スペイン交流400年事業の開幕記念音楽会にて芸術監督・メインソリストを務めた。川上さんが辿っている音楽の旅について伺った。

―3歳からピアノを始めて、音楽高校に進んだそうですね。

生まれたのは愛知県の長久手市(旧長久手町)です。父が愛知芸大の美術の先生をしていて官舎住まいでした。隣の人がピアニストで、遊びに行っているうちに何となく私もピアノを弾くようになった感じですね。小学校の時は、遊びに出かけたいという気持ちもあったんですが、両親にやりなさいと言われ、毎日きちんと練習はしていました。

高校の時は弾きたいからというより、試験に落ちないため、入学試験に受かるためという目標に向けての練習です。楽しむという感じではなかったですね。でも、ベートーベンは好きでした。そして、この一節はいいけどその先はこの方がいいのになんて思って、自分で勝手に変えて弾いたら、先生に叱られました。悪気はないんですけど、妄想が動き出してそうなっちゃうんです(笑)。

世界を旅して見つけた時間、場所、人が融合した「日本的」音楽そして支倉常長が結ぶ縁が広がる

interview

—ミュンヘン国立音楽大学に進みました。

4歳の時に父の仕事の関係で1年間ドイツにいたことがあり、ドイツに住みたいと思っていました。それに、好きな音楽家にドイツ人が多かったこともあります。ベートーベン、ブラームス、バッハとか。だから音楽を勉強するんだったらドイツと思っていました。

大学の時はあらゆる曲を毎日10時間近く弾くので、最初はいいと思えなかった曲も、その中にきれいな音が見えてきたりすることが楽しかったです。例えばモーツアルトの明るい音楽に辛さや苦しさが見えます。あの時代は職人として、この舞踏会用に、この人のためにと、注文された音楽を注文通りに書かなければいけなくて、個人の感情は曲に盛り込めません。でも天才の中には、苦悩であるとか病の苦しみとかが曲の中に潜んでいる。そういうところがものすごく美しいと思いました。

—日本とドイツで教育の違いはありましたか。

全然違いましたね。ドイツの入学試験では完璧に弾いた人が合格する訳ではなく、将来伸びるだろうという人を採るんです。私は日本の音楽高校から行ったので、技術も楽理の知識もある程度ありました。ところがドイツでは素人のような人も入ってくる。大丈夫かなと思ったら、卒業するまでにすごい勢いで伸びていくんです。1学年10人以下で、先生は1人1人しっかりと教えます。そしてこの人は才能がないと思ったら、先生ははっきり言います。でも破門ではなく、別の方向に進んだらどうかと親身になってその人が幸せになる道を探してくれるんです。

私は大学で成績の良い方ではなかったので苦しかったですね。上手な人はどんどん国際コンクールで優勝していく。私の手は小さくて、今は、だからこそ弾ける音もあると分かりましたけど、当時は辛かった。キリスト教の背景がないのもハンディ。彼らは、クラシックの礎である教会音楽を生まれた時から聞いて育ち、潜在意識に浸透しています。この和音の次はこうなると自然に分かる。でも日本人の私は分からないから一つ一つ勉強して覚えて行かなければならないんです。

—一生懸命勉強していたのに、何もかもいやになって、旅に出たそうですが。

何をやってもうまくいかない。ピアノの芽は出ない、弾けば弾くほど腱鞘炎になってしまう、友だちともうまくいかない、ベルリンの壁が崩壊した時期で、東ドイツから天才たちが雪崩のようにやって来る、そんなことが重なりました。本当にいやになって、直感でスペイン行きを決めました。旅行会社にあったパンフレットを見て、スペインへ行き、太陽を見たいと思ったんです。大学も卒業したし、最低限の荷物を持って出かけました。

—スペインに行ったとたんに強盗に遭い、一文無しになってしまったとか。

マドリッドに着いたら、太陽が輝いていまし

マドリットのひまわり

日本は与えられた曲を正確に弾くという教育、ドイツは将来性をみて個性を伸ばす教育。ギャップにかなり苦しい思いをしました。

ピアノは自分を表現する大切なパートナー。苦しい時も止めることはなかった

領事館での手続きを待つ1週間ぐらい、スペインの人に親切にしてもらいました。一文無しでスペイン語も話せない。仕方なく居酒屋とレストランを兼ねたようなバルのある通りをウロウロしていたら、お店の人が呼んでくれて、お魚を焼いてくれたり、ワイン1杯出してくれたり、無償で食べさせてくれました。何人もですよ。スペインは、いろいろな人種、民族がいるし、いい人も悪い人もいるしで、ホントにいろいろなものがぐちゃぐちゃに混ざった国。それが魅力ですね。

—何もかもいやになったのに、やはり音楽の道に戻りました。

一旦ベルリンに戻り、死ぬほどアルバイトをしてお金を貯め、またスペインに戻って、マドリッド国立音楽大学院に入学したんです。

やはり私は音楽しかできない。もう一度音楽を勉強しようと思いました。大学院に入ったら、またドイツとは違う雰囲気でしたね。ベートーベンを弾いているのに、どこかフラメンコっぽいリズムになっている。音楽の本場ではいけないことを平気でするのを見た時、そうか、別にいいんだなと。また、音楽家といわれる人たちで、楽譜を読めない人がたくさんいるんです。でも天才的な人がいてグラミー賞をもらったりしている。音楽をするのに、楽譜が読める、ピアノを持っているというのは必要な条件ではないんですね。

—そのグラミー賞を受賞したチューチョ・バルデスの演奏を聞いて感動し、今度はキューバに行くことにしました。

たまたまキューバ人ピアニストのチューチョ・バルデスの演奏会に行ったんです。それまで悩みながら自分なりにベートーベンやショパンなどを弾いていた訳ですが、彼の演奏を聞いて、これこそ探していた音楽だと思ったんです。ラテンジャズという分野で、アメリカのジャズとはちょっと違う。中南米は植民地の歴史があり、ヨーロッパ系、先住民、アフリカ系、アジア系の人の音楽が全部ミックスされ、濾過されて生まれたような音楽です。音楽にあふれる歓びというか自由さというか、爆発的なエネルギーがあって圧倒されました。

でも、自分がチューチョ・バルデスを真似て同じジャンルの音楽に行くかというと、そういうことではないんです。この人のやっていることを突きとめれば、自分の音楽が見えるだろうという確信のようなものでした。今だからそう言えるんですが。当時はよく分からないまま、とにかくこの人の演奏を生んだキューバを見てみたいという思いだけで、マドリッドの大学卒業後に引っ越しました。

スペインやキューバの土地、音楽家に出会って自分を縛っていた戒めがどんどんなくなっていきました。

—また違う音楽環境に身を置いたのですね。

キューバ国立音楽学校の客員講師として教えることになりました。ところが、ピアノがない、電気がない、水がないという状況。ピアノがあっても蓋を開けたら鍵盤が半分ぐらいしかない、ペダルが折れていて使えない。むしろそこから始まるのが面白い。子供たちはそんなピアノでもきれいに楽しく弾くんですよ。めちゃくちゃでもあるんですけど。

何でも楽器にしてしまう国です。誰かが石を拾って音を鳴らすと、他の人も石や枝を拾って一緒に演奏する。別の人は踊り出す。何もない所から音楽を生み出す究極の発明家たちです。こうしなくちゃいけないと自分を戒めていた考え方が取り払われていきました。

—そして日本とスペインを拠点に、演奏と作曲活動をするようになってきました。

2000年に帰国して、最初は東京でしたが、美しいと思える場所に住もうと、あちこち探して京都が気に入りました。スペインも好きなので、行ったり来たりすることに。

作曲は、ピアノを弾きながら直感できれいな音のつながりを探して作っています。ジャンルは何ですかと聞かれて困るんですが、クラシックもジャズもその他の音楽もみんな入っている。できた曲をみると、自分の好きなキューバの場所であり、スペインで助けられた人の思いであり、いろいろなものが自分の中で濾過されてシンプルに出て来た音楽で、自分では日本的だと思っています。

—支倉常長の慶長遣欧使節に因む「日本スペイン交流400年事業の開幕記念音楽会」で芸術監督、ソリストを務めました。

私は以前から支倉常長に関する本を読んでいて、興味を持って調べているうちに、研究者が仙台にいると分かってファンレターを書いたりしていたんです。

そうしたら、日本大使館から400年事業のお話が来ました。開会式で支倉常長の旅を描くコンサートを提案し、実現したんです。作曲のため支倉常長の辿った道を歩いてみようと思って、メキシコに行き、宮城県に来ました。月の浦は旅立ちの場でもあり、コンサートは「月の浦」という曲で始めたかったので何度か足を運びました。曲を作っている時は風景を描写しているという感覚でした。

多くの人とともに準備を進め、当日はマドリッド王立劇場でスペインと日本の皇太子殿下のご臨席のもと、会場の皆さんと共に支倉常長の道を辿れたように思います。その曲はライブ録音で「侍」と「キリエ」という2枚組のアルバムになりました。

「日本スペイン交流400周年」のコンサートで川上さんが作曲・演奏した曲を収めた2枚組アルバム「侍1613」。慶長遣欧使節・支倉常長の旅を描写したピアノの音が美しい。カバーの題字は福聚山慈眼寺住職・塩沼亮潤大阿闍梨の揮毫。CDは、4100円（税込）※取り扱い箇所、仙台市博物館ミュージアムショップ・青葉城資料展示館売店

—この事業で、支倉常長が多くの出会いを導いたと感じたとか。

支倉常長という人が400年前にいた訳ですが、今、別な形で生きていると思わずにはいられないことの連続でした。滅多に演奏できないような舞台で演奏ができたし、素晴らしい人とつながってきたし、出会いの道でした。おそらく400年前の支倉常長もそうだったのではないでしょうか。その出会いの種がいろいろな所に点として残っていて、今それが線でつながったということを私は実感しました。まだその種はあちらこちらにあると思います。全く違う分野にいる私たちを導いているんですから。

チューチョ・バルデスと私を改めてつないでくれたのも支倉常長です。2004年にキューバで彼と共演できたのですが、二度とない奇跡だと思っていました。ところが、彼は400年事業の開会式コンサートをたまたまテレビ中継で見ていたんです。私のことを思い出して電話をく

私と宮城をつないでくれたのは支倉常長。彼は400年も前に、現代の世界の人々を動かす種をまいていたんです。

10月にレストラン・びすた〜りでコンサートを開催。宮城に来る機会が増えて、新たな出会いを楽しんでいる

川上（かわかみ） ミネ

1969年愛知県長久手町生まれ。3歳でピアノを始める。愛知県立明和高校音楽科卒業。ミュンヘン国立音楽大学ピアノ科卒業。マドリッド国立音楽大学院ピアノ科卒業。クラシック音楽家としてスタート、その後様々なジャンルの音楽を取り入れ、独自のスタイルを築いている。現在、京都とマドリッドを拠点に世界各地で演奏活動を行っている。

れ、良かったと言ってくれました。特に「月の浦」がいいと。もう気絶しそうに嬉しかったです。おかげで親しくなりました。支倉常長はいろいろな時代、いろいろな人をつないでいるんです。

—宮城県にも縁ができましたね。

この頃、帰国する度に宮城に来るので、友だちに引っ越したのかって聞かれます。食べ物が美味しいですよね。お魚、ホヤ、それからお酒。セリ鍋も気に入りました。力のある音楽と同じで、力のある食材という感じがします。エネルギーがいっぱいという感じ。

それから人。面白い人、個性キラキラの人が多くていつも新発見の連続ばかり。違う分野の人たちが最大限に力を発揮してくれ、そのおかげで「侍」のアルバムもできました。ハーモニーってすごいなと思います。

—今後はどんな活動に力を入れる予定ですか。

私の次のテーマはキューバだと思っています。来年からまたキューバで演奏活動を再開する予定です。今アメリカと国交が復活して状況が変化していますし、私も20年前の友だちとまたつながったり。再びラテンジャズを自分の音楽に融合していく予感があります。

—さらなるご活躍を期待しています。ありがとうございました。

インタビュー／南條成子　撮影／鈴木江美